

東京女子専門學校教授

青 木 誠 四 郎 著

適當なる運針練習時間について

東京女子専門學校 研 究 部
渡 邊 女 學 校

序

この研究報告は本叢書第十一、小學校に於ける運針成績標準と共に、さきに公にした「運針指導について」の補遺となるものである。共に小學校裁縫科の運針指導に對して、若干の寄與をなす目的で研究されたものであるが、中等學校の裁縫科指導にも亦参考となるものあるを疑はない。

この研究は、東京女子専門學校における裁縫研究會の發案により、同校長渡滋先生の援助と、東京市神田區芳林、千櫻、西神田今川、練成、錦華各尋常小學校裁縫科擔任諸先生の協力によつて成つたものである。記して以て謝意を表し度い。

昭和十五年六月

著 者 識

一、運針練習の時間はいかにすべきか

運針が裁縫技術の基礎として大切な意味をもつてゐることは今更こゝに説くまでも無い事である。そこでこの運針を正しくかつ速くできるやうに児童を指導することも裁縫の基礎教育として極めて大切になるのであつて、そのために多くの学習時間を割くことも當然なことゝ云はなくてはならない。今日小學校に於て、また高等女學校に於て運針指導のために多くの時間を割き、これを重視してゐることもこの理によるものといふことができる。

けれどもこの基礎教育としての運針の指導を重視することは當然としても、その指導はたゞ時間さへ多く割けばよいとは云へまい。その効果をあげ目的を達するには、そこに自ら道があると云ふべきである。この目的を達する道としてはいろいろなことが考へられなくてはならないが、その一つとして運針練習を課するときの時間をどうすべきかと云ふことが考へられる。従來小學校や高等女學校での運針練習について見ると、時に十分と云ふやうな比較的長い練習時間をもつてこれを課してゐる例を見るのであるが、多くは一度に二分とか三分とか云ふ短時間の練習を毎日するやうにしてゐることが多いのである。併しこの場合「いつたいどちらがよろしいのであらうか」と問ふものがあるとしても、それに答へられる確乎たる根據は、いづれも有つてゐるのでは無い

かと思はれる。短時間練習を課するのも、多くの方がさうしてゐるからと云ふ場合もあらうし、毎日練習をするのは其時間を求めるのは無理だからと云ふ場合もあらう。多くは便宜から來てゐる。又時には練習は毎日短時間頻回行ふ方が効果があると云ふやうな多少の根據をもつてゐる人もあらうが、これも運針に就て確かめられたところとは云へないので根據としては弱いと云はなくてはならない。長時間課する場合にも、たゞその方が便宜だと云ふ人もあらうし、また運針は長時間繼續する必要があるのだから長い時間で練習するのが當然だと云ふ多少の根據をもつ場合もあらう。併し便宜主義は勿論、多少の根據があるとしてもそれも亦確實に試られた證據と云ふものが無いのである。

かやうにして運針練習の時間は、長いのがよいと云つて長い時間の練習をさせるのが効果があると思つてゐる人もあれば、全く短時間頻回に練習してゆく方がよいとする人もあつてその歸するところを知らないので實際の指導をする場合いかにすべきかに迷ふのが現在の状態である。

そこでこの研究に於ては、このいづれを果してよしとするかについて、實驗的に明かにし、運針指導の實際問題に一つの解決を與へたいのである。

二、研究の方法と條件について

この研究は、以上のやうな目的から見て、その解決に最も都合のよい、はじめて小學校で運針を學び、かつて何等の形に於ても練習らしいことをしてゐない尋常四年生を選んだ。

まづ兒童は昭和十四年四月に運針の運動の形について學習せしめられた。この指導は各實驗兒童群を通じて次のやうな細案を同様に取扱つて指導した。

豫定

第一時 裁縫する時の心得

用具の使用法、整理法

針の長さを調査

方法 指貫をあて拇指をのぼし食指との指先きを揃へ2mm乃至4mm長きものを使用させる。

(註) 便宜上大、中、小

指長順にしてきめる。

◎指貫は皮にて座穴のあるもの。

第二時 布の持方、姿勢

運び方

指貫をしめ直し

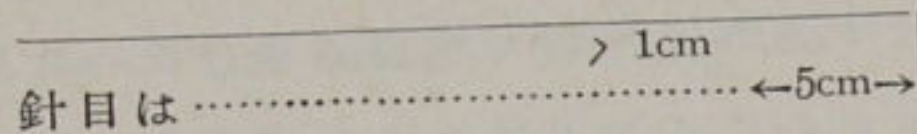
第三時 針の持方

布は二つ折にすること

運び方……………糸コキのまねの練習

(注) 左右の手の間を15cmとする

第四時 素縫(糸の長さは20cmを二つ折り)



針の安定を保つ爲…… 最初二針縫つておいて、指貫を裏から當てること

(10cmの間で……………表にでる目6ツ半 裏で7ツを理想とする質で)

糸こき

糸の切り方

この指導について練習を課したのであるがその時間の長短を第一表のやうに分つて、六つの学校のそれぞれの児童群に異なる練習時間を以て練習を課した。その練習期間は五月にはじまつて七月初旬までの八週間にわたつた。

第 1 表

練習時間の長短による群別	児童数
A (校) 毎日1回2分(8週)48回	49(名)
B 毎週2回6分(1分作業6回,間休2分)	38
C 毎週2回6分(3分作業2回,間休2分)	55
D 毎週2回6分(繼續)	46
E 毎週1回12分(繼續)	59
F 毎週1回12分(繼續)	60

(備考 總時間はすべて96分)

これ等練習期間中は、練習毎にその速度の記録をとつたが、更に練習の終了後各実験群に1分及12分の運針検査を行つて、その速度及質の調査を試みた。

以上の実験は、すべて東京市神田區所在の小學校六校に於て行つたのであつて、各學校裁縫擔任教師によつて進められた。實施に先だつて數次會合して詳細な打合を行つて遺漏なきを期した。この結果は全くこれ等裁縫教師諸氏の協力の賜である。

三、結 果

1. 練習による進歩のあと。

こゝでまづ第一に注意されるのは、この練習の期間中にどのやうな進歩の相違を來すかと云ふ事である。

いま、毎回測定した針目の數と長さによつて、練習期間中に於ける速度の進歩の状態を見ると第二表に見るやうである。

これ等のうちD校の實驗は第一週の練習に於て時間を誤つたため他との比較が許されないものとなつた。又F校のものは表に見るやうにその結果が著しく不規則であつて、何等かこの不規則を來す原因が混入して居ることを豫想せしめるものがあるのでこれも觀察の資料として適當なものと云ひ難い。そこでこれ等二校の結果を措いて、他のA, B, C, Fの各組の練習による速度の進歩の状態を第一週の成績を一〇〇として比率を以て示すと、第一圖のやうになる。

こゝに示される曲線によつて、練習時間の長短による進歩の状態の相異を見ると、一般として短時間の頻回の練習に於てその進歩が著しく、これに反して長時間の練習の方が進歩の遅れることが見出される。これを進歩の割合から見ると毎回2分の練習は最初の週の速さに對して最後の週には186パーセントに達し、殆んど二倍の速さをもつのが見られるのである。然るに長時間の練習を一週一度するものでは、

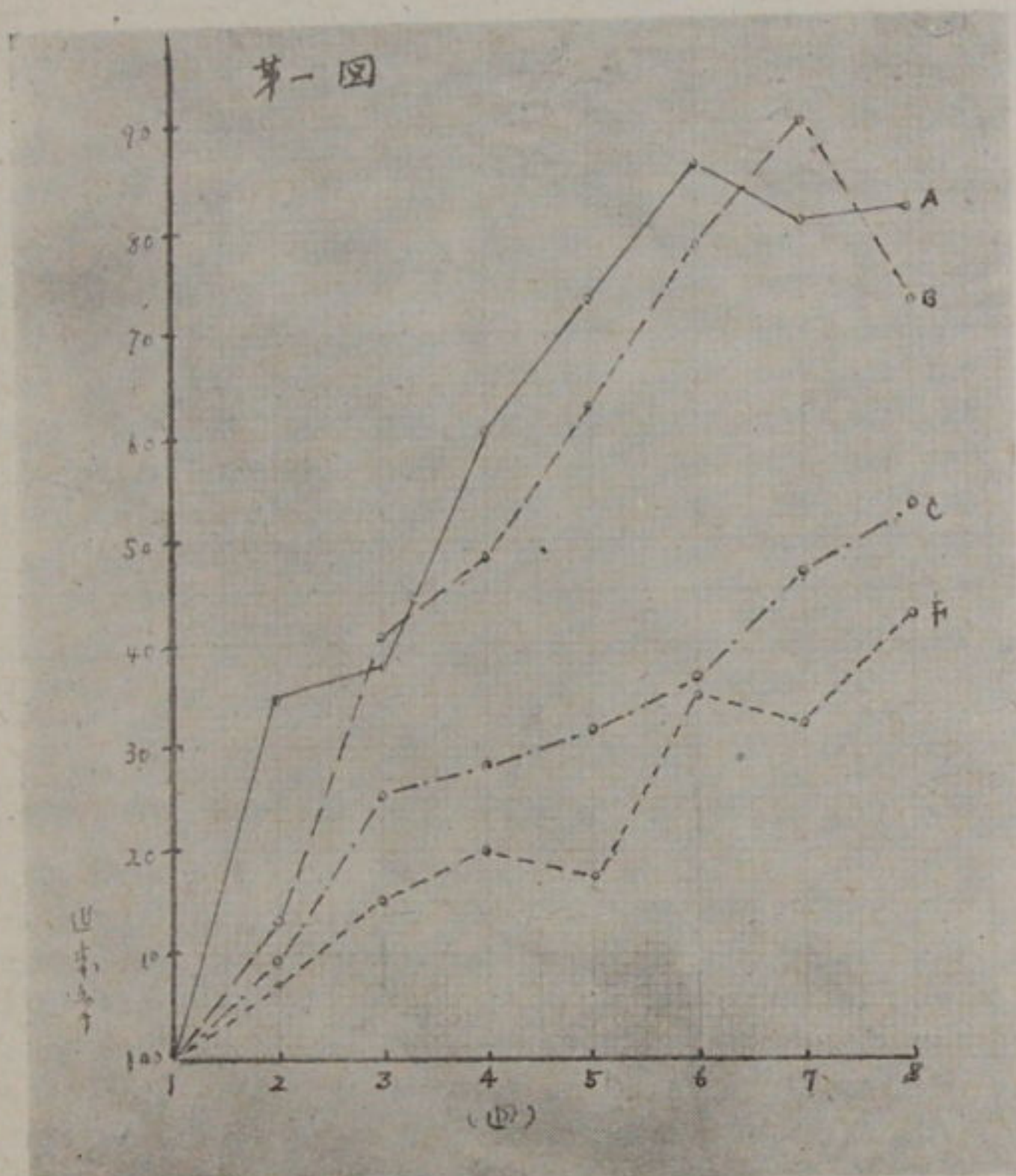
第 2 表

學校 速さ 練習週	A (二分)				B (六分) (一分六回)				C (六分) (三分二回)			
	長 さ		針 目		長 さ		針 目		長 さ		針 目	
	實數	率	實數	率	實數	率	實數	率	實數	率	實數	率
1	51.4	100.0	28.6	100.0	210.0	100.0	169.0	100.0	114.5	100.0	77.0	100.0
2	62.0	120.7	38.6	135.0	230.5	109.8	191.0	113.0	108.5	94.8	85.2	109.8
3	59.5	115.6	39.6	138.2	240.0	114.3	237.5	140.6	125.0	109.3	97.2	125.1
4	63.1	122.4	46.0	160.5	264.0	125.7	250.5	148.4	121.8	106.5	99.4	128.0
5	62.0	122.6	49.6	173.0	278.5	132.6	275.0	162.8	122.2	106.9	102.3	131.9
6	64.2	125.0	53.3	186.0	283.0	134.8	302.0	178.6	127.5	111.6	106.1	136.5
7	60.4	117.6	51.7	180.2	307.5	146.5	320.0	190.0	129.4	113.2	114.1	146.9
8	57.8	112.0	52.2	182.0	296.0	141.0	292.0	172.8	130.1	113.8	118.3	153.8

學校 速さ 練習週	D (六分)				E (十二分)				F (十二分)			
	長 さ		針 目		長 さ		針 目		長 さ		針 目	
	實數	率	實數	率	實數	率	實數	率	實數	率	實數	率
1					125	100.0	116	100.0	127.3	100.0	108.9	100.0
2	12.15	100.0	9.00	100.0	138	110.4	132	114.8	129.0	101.3	116.5	107.0
3	13.93	114.7	10.4	115.9	168	134.4	162	139.7	132.1	103.8	125.3	115.0
4	14.61	102.2	11.2	125.1	148	118.4	143	123.3	133.9	104.4	130.9	120.1
5	15.35	126.3	11.9	133.0	140	112.0	137	118.1	132.8	104.3	128.4	117.9
6	16.43	135.2	13.0	144.6	170	136.0	157	135.4	152.0	120.1	147.0	135.0
7	17.39	143.2	13.4	149.5	209	165.5	196	169.0	146.4	115.0	143.7	132.0
8	18.16	149.5	14.5	161.7	172	137.6	187	161.1	160.2	125.8	155.6	142.8

- (備考) 1. 表中の數字、A校は1週6回の平均
 2. B校C校及D校は1週6分2回の平均
 3. E及F校は1週1回2分の速度
 4. %は第一週の速度を100とする百分率

最高の速さに達した時でわづかに 135% に達してゐるに過



ぎないのである。そこには練習時間の長短兩極端で相當のき開が示されてゐるのを見るのである。

このやうな結果は練習の時間の分配について従来研究されたものと全く同様である。例へばマン及スターチが置換作業(數字と文字とを置き換へる知的作業)について研究した

ところを見ると、いづれも短時間毎日の練習の方が間隔を大にして一回に長時間の練習をするよりその効果が大であると報告されてゐる。従つてわたくし達がこゝに見たやうな結果はいはゞ確實なるものをもつてゐると云ふことができるのである。

然らばこの結果を示す原因はどこにあるであらうか。これを推定して見るに一分或は二分の練習時間であれば、児童はその時間中全力をあげて作業するに相異なる。いはゞこの時間のうちはずべて充實した練習がなされることゝなるのである。ところが長時間の練習をする場合には、その時間のすべてに全力をあげるには長過ぎる。その後の部分は疲労のために少くとも練習の最初の時期に比しやゝ弛緩した状態になるだらうと云ふことが考へられる。更にこれと共に考へられることは、長時間の練習に對しては長時間の作業の態度ができ、後のために勢力を備へて、最初から全力を出さないと云ふことも考へられる。いはゞ短い練習時間は長い練習時間と比べてその練習時間中の充實の状態が異なるので、そこに練習によつての進歩の状態が異なるものと見られるのである。この事はB校のやうな著しく速い(この学校の1分の記録は、その第一回に於て27針であつて、2分の作業の第一回20.8針に比してすら速かである。従つてこの学校の児童には何か特殊の事情があると思はなくてはならない場合を除いて、各学校の第一回の速度の記録をB校の2分の速

度の記録を標準とし比べて見ると明かになるものがある。即ち第三表のやうである。

第 3 表

練習時間	速度	2分標準の 當然の速度	その比率
A (校) 2分 毎日	28.64		
C 6分 毎週2回	77.66	85.32	91%
F 12分 毎週1回	108.91	170.60	63%

この表に見るやうに、6分の練習時間をもつ場合には、もし2分と同じ状態の作業ができれば、その速度はその3倍即ち85.3針と云ふ速さにならなくてはならぬのに、事實は78針に過ぎないのである。12分の場合にはそれが更に甚だしく、當然ならば2分の6倍即ち170針を超えなくてはならぬのに、実際の速さは109針に過ぎず、當然の速さの63パーセントに過ぎないのである。かうして見ると12分練習すると云つてもこれは2分の6倍練習してゐるとは云へないのである。従つて長時間の練習はその実際の練習作業量が少く、ためにその効果が少いことが考へられる。これは短時間の練習が長時間の練習に比べて効果の大きい(或は大部分の)理由の一つと考へられる。

このやうな状態が続くのであるから、練習が重ねられるに従つて、その効果は持ち越されることゝなつて練習の後の時

期ではこの状態は一層著しいものになつて来る。次にあげるものは第6週の作業速度の成績であるが、その示すところは、6分一週2回に於て當然の成績の67%、12分一週1回に於ては、僅かにその46%で、當然の成績の半にも達しないのである。

第 4 表

練習時間	實速度	2分標準の 當然の速度	その比率
A 毎日2分	53.20(針)		
C 毎週2回6分	106.06	159.9	66.6
F 毎週1回12分	147.0	319.8	46.1

以上のやうに見て来ると、練習中に於ける運針速度の進歩は、短時間の練習で著しく長時間の練習には少い。そしてこれは多くその練習時間の充實の状態に左右されるものと見られるのである。この點から見ると運針練習時間は、従來の練習時間の長短についての研究結果のやうに短時間頻回の練習が望ましいと云ふやうに見られるのである。

2. 練習後の運針に見られるところ。

以上はいづれも運針の練習中に現れて来るその速さのみについての進歩に關するものであつた。併し運針の練習は實際の仕事をする場合に、どう云ふ効果をもたらすかにその

効果を窺はなくてはならない。練習中にどう進歩するかと云ふよりは、練習後にどう云ふ影響があるかと云ふことに窺はなくてはならぬ問題があるわけである。果して練習中に現れた上のやうな状態が、練習後いかなる場合の運針にも現はれて来るものであるかどうか。その點について明かにして見なくてはならない。更にまた以上に見たところは、運針の速さだけについてとあつたけれども、運針の指導で求めてゐるところは、速度の速いと云ふことだけでは無い。運針には速さの外にその歪みの少いこと、流れの無いこと、針目の齊一であることが求められてゐる。即ち良い質の運針が求められてゐるのである。従つて練習の効果を見ようとするならば、この運針の質が練習時間の長い短いによつてどう違ふかを見なくてはならないのである。かうして、わたくし達の目的としてゐるところから見て、運針練習の効果を知らうとする場合、まづ練習後の運針にその効果がいかに現れるか、次にそれが量に於けると共に質に於ていかに現れるかを見なくてはならないのである。

このやうな目的からさきに述べたやうに、練習後の運針検査を課したのであるが、この場合短時間の運針に現れる状態と、長時間の運針に現れる状態とを見るために、一方一分の運針検査を行ひ、他方12分の運針検査を行つて、兩者についてその速度及質の両面にわたつてこれを調査して見た。

まづ1分の運針検査の結果について見よう。この場合も

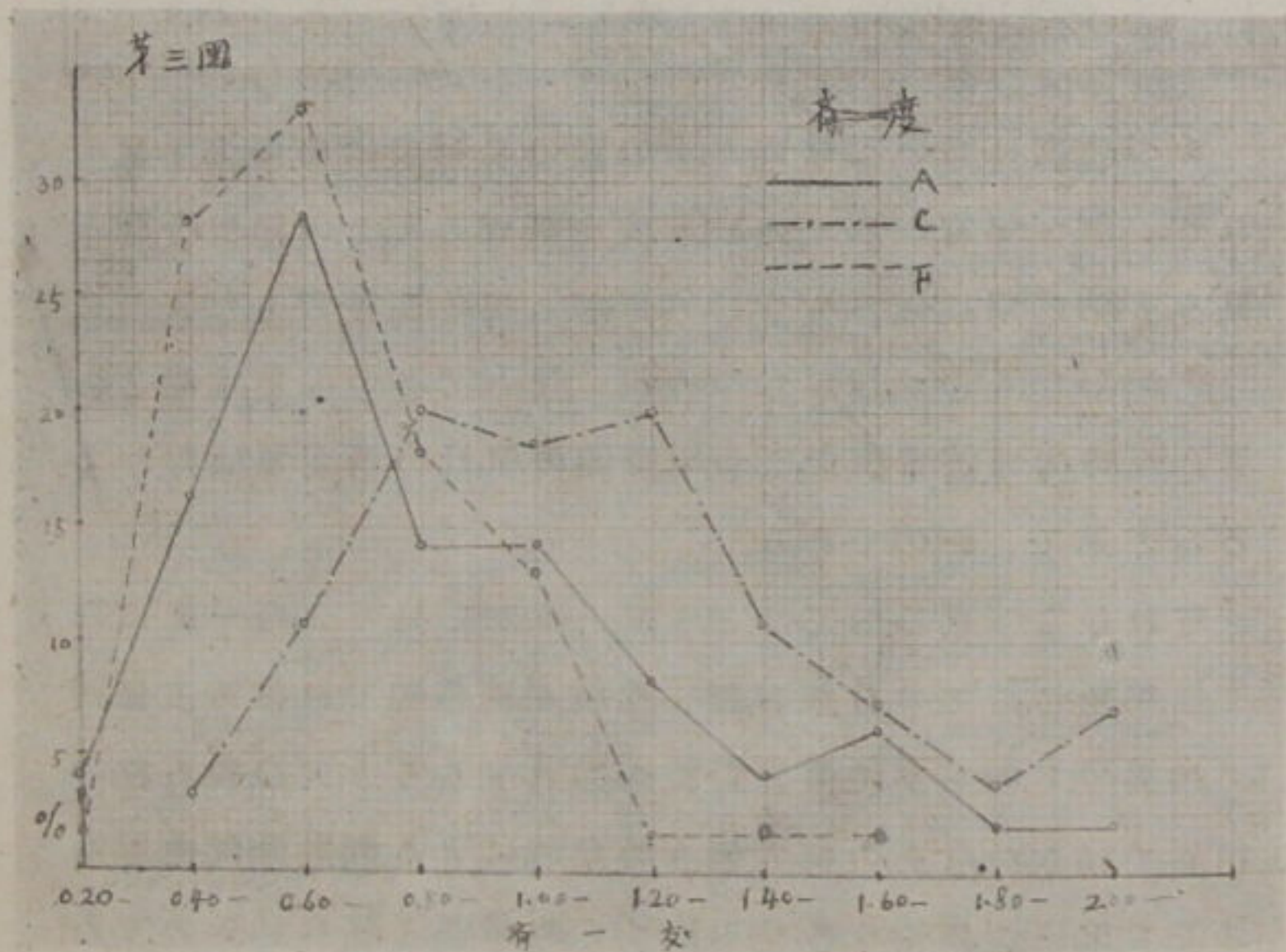
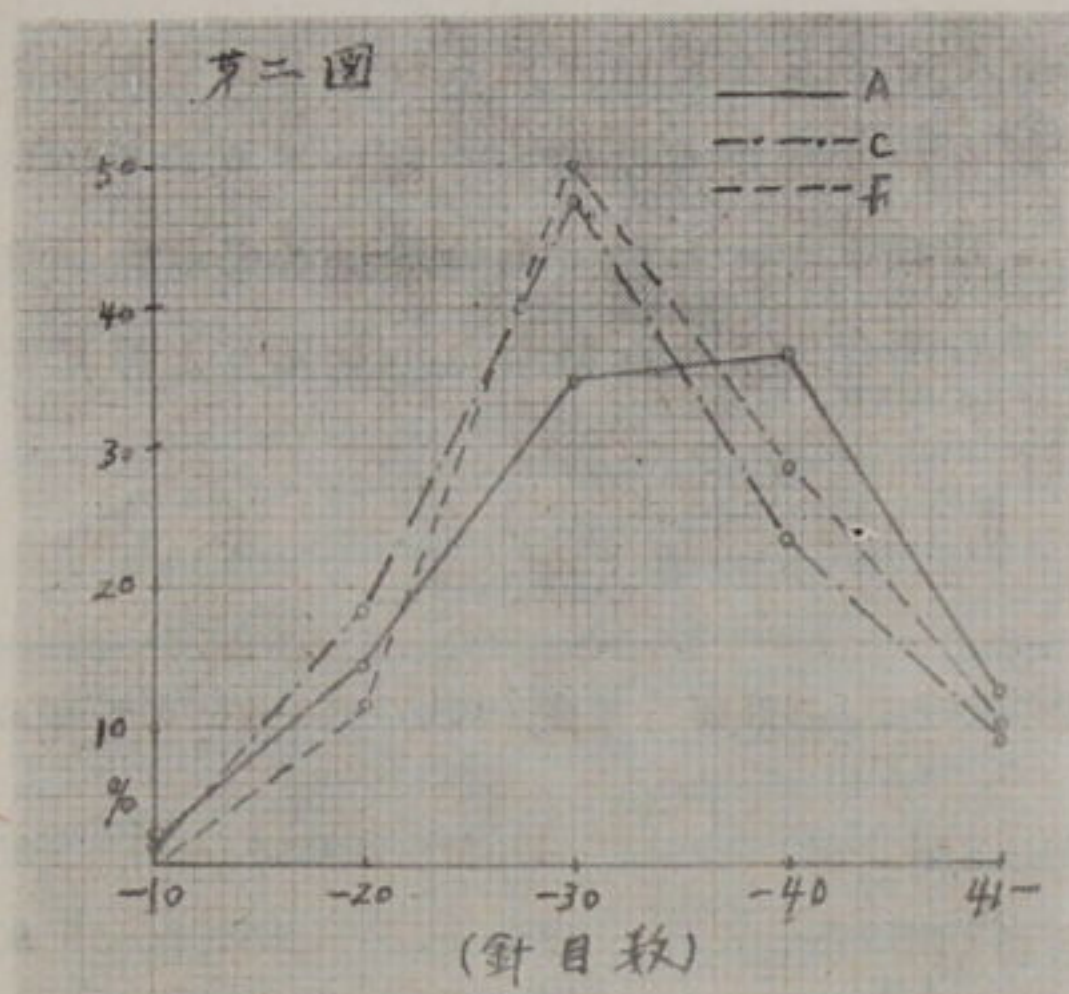
兒童の素質から著しく速いと見られるB校兒童、及さきに見た發展の著しい不規則なE校とを除いてA、C、Fの三校の結果について見ることにした。その速度及歪み、齊一度(流れは調査の人手の都合でこれを略した)を見ると第五表のやうである。

第 5 表

練習時間の長短による群別	速度(平均)	齊一度(平均)	歪み(平均)
A 毎日1回2分	30(針)	0.96(mm)	35.1(%)
B 毎週1回12分	28	1.23	50.2
F 毎週1回12分	29.5	0.75	48.8

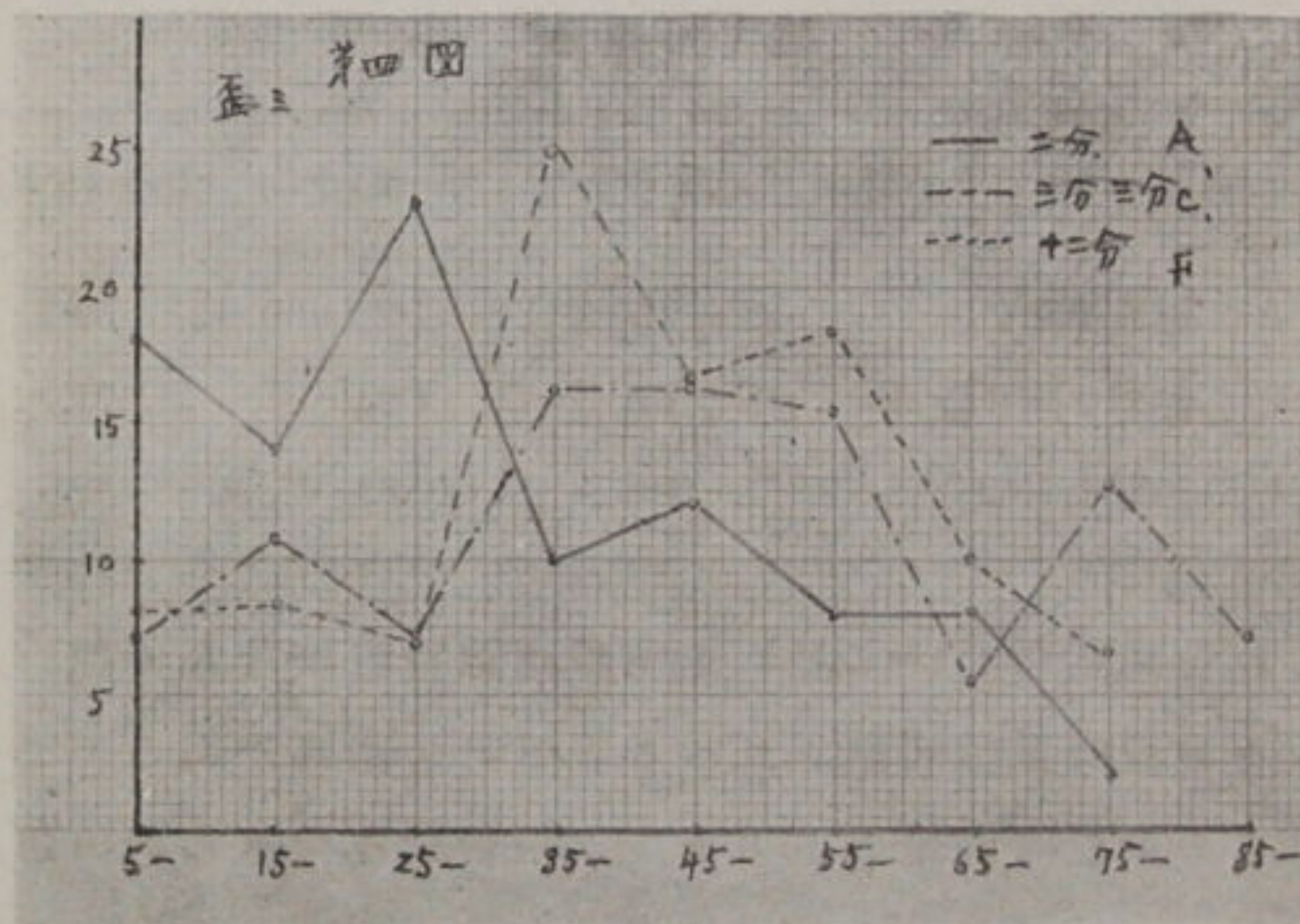
まづ速度について見ると、上の表の平均では略同じと見られる。ただ兒童一人一人の速度を調査して、その頻數分配を見ると、第二圖に見るやうに、A組即ち短時間練習したものに於て速かなものが、他の二つの組に比して多いので、大體この場合短時間の練習組が、この短時間の運針の速度では秀れてゐると見てよいのである。

それならば質に於てはどうであるかと見ると、齊一度に於ては、平均に於て6分練習組に悪いが、兩極端では極めて僅かの相異で、F即ち長時間練習組が秀れてゐると云ひ得る程の相異ではない。その個人個人の成績による頻數分配曲線を見ても第三圖のやうに、Cを除くと略同様と見られるのであ



る。(この場合Cの著しく劣るのがいかなる理由によるのかは明かでないが、たゞ練習時間の相異から来るものでないだらうと云ふ事は、云はれやう。それは短時間と長時間との関係からはづれてゐるからである。)

次に運針の質に於て最も大切と見られてゐる歪みについて見ると、その平均に於て、Cが最も多いが練習時間の長短兩極端を比べて見ると、A組即ち最も短い時間練習した組に最も少ない。これは平均に於てもさうであるが第四圖の個人



成績の分配曲線に於ても見られるところである。最も長い練習時間をもつた組はこれに比して歪みが多いのである。

以上のやうにして、練習後の運針成績に於て、短時間の運針では、長短兩極端の運針練習時間を有つ組を比較して見ると、

短時間の練習組が、その速度に於ても質に於ても秀れたものを示すと云つてよいのである。

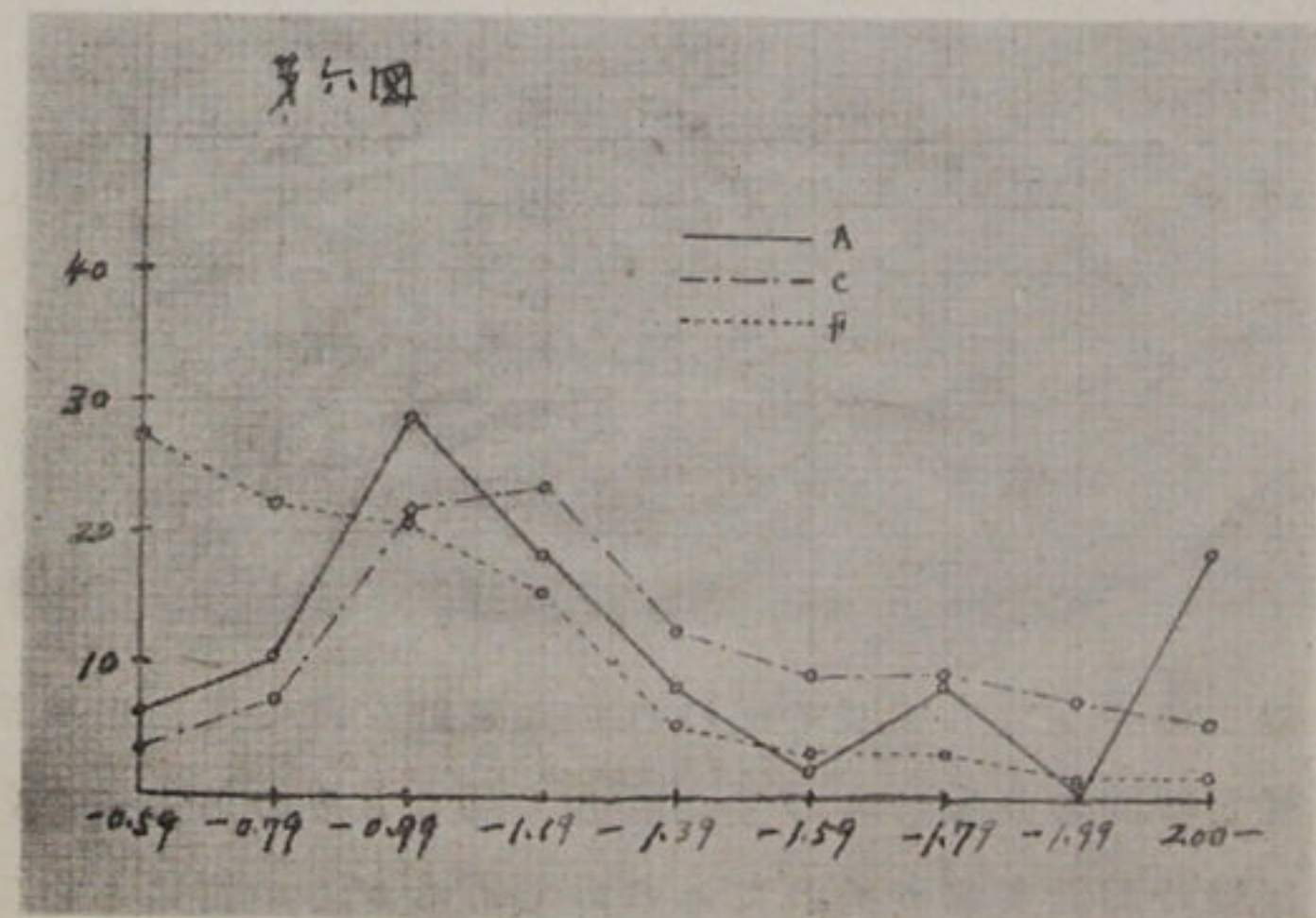
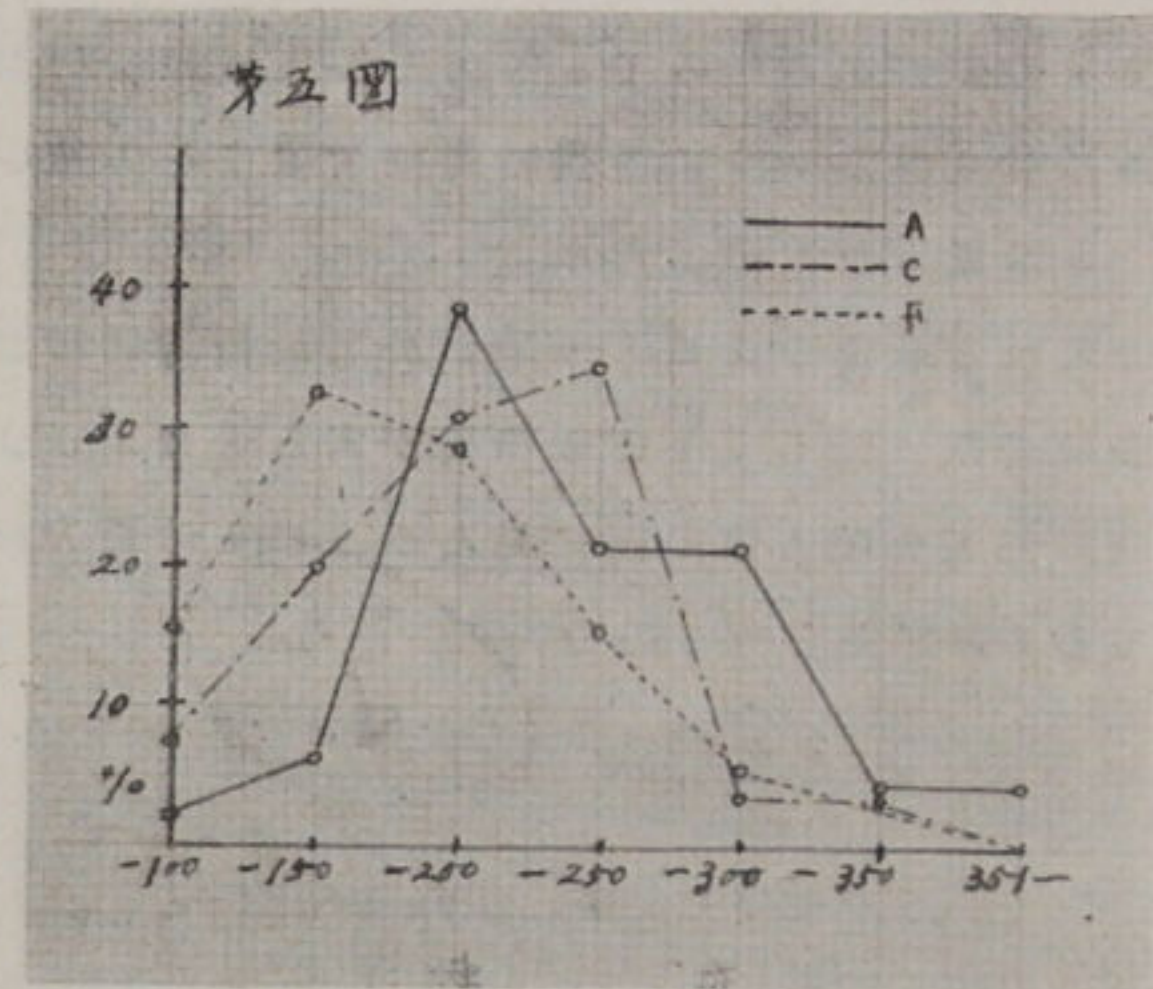
さて、以上のやうな短時間の運針検査の結果に見る傾向は、そのまゝ長時間の運針検査にも現れるであらうか。次に12分の運針検査に現れたところを窺つて見よう。その結果は、第六表のやうである。(この場合歪みについては、全体の針目の脱逸を見たが、齊一度については、中央20針について、その測定をした。)

第 6 表

練習時間の長短による群別	速度 (平均)	齊一度(平均)	歪み (平均)
A 毎日1回2分	91 (針)	1.25(mm)	59.1
C 毎週2回6分	181	1.24	71.7
F 毎週1回12分	166	0.88	52.0

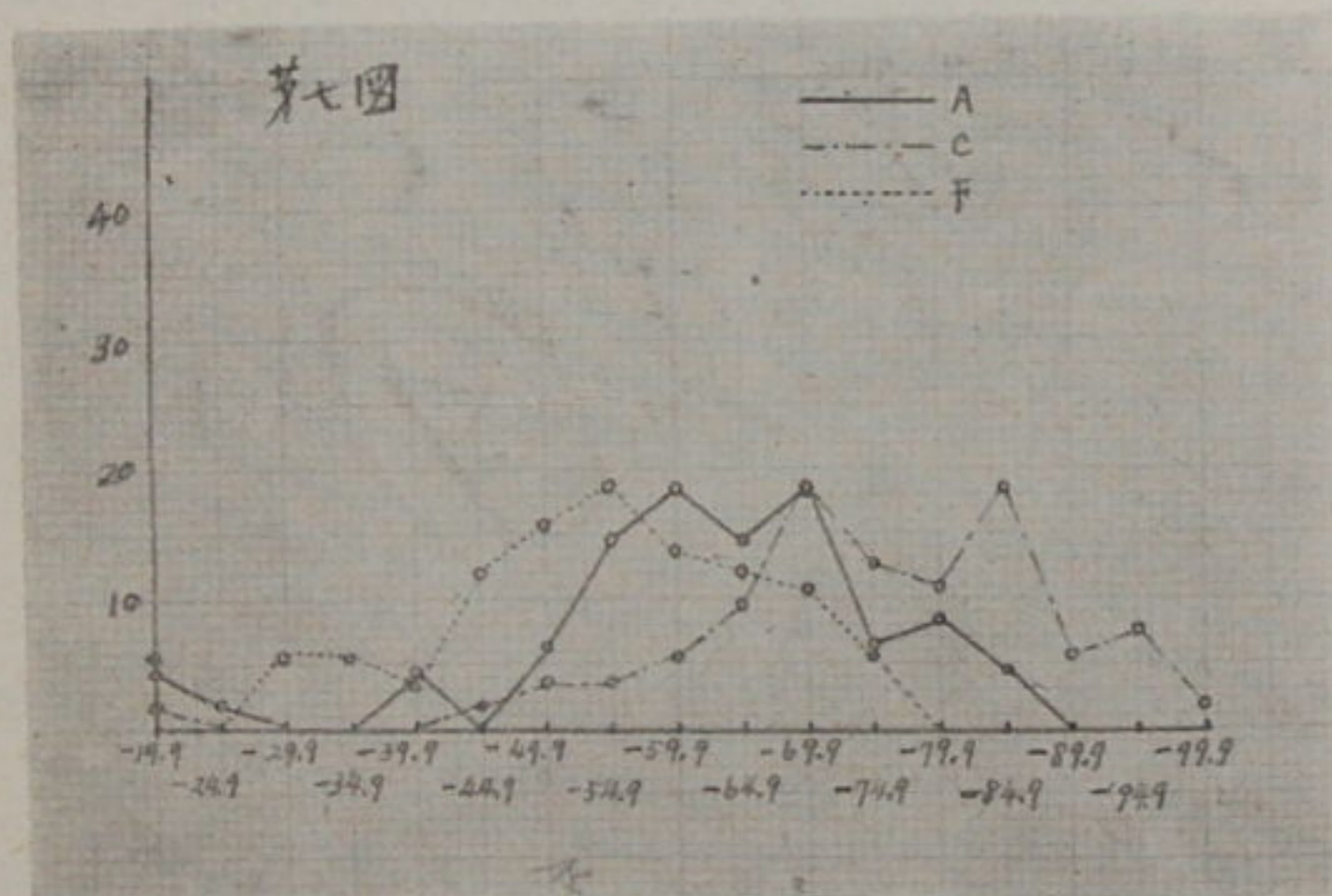
これを速度について見ると、短時間練習組が著しく速い。これを最長時間練習組と比べると、51針の相異がある。この差は、この最長時間練習組の速度が練習最後の第八週 of 速度と相似てゐることから見て、練習によつて到達したところと見られるのであつて、さきの練習中における速度の進歩がまた練習後にも現れるものであることが知られるのである。この事は第五圖に示した個人成績の頻数分配曲線にも見られるのであつて、その最大頻数が、短時間練習組では 201—250

の間にあるのに、最長時間練習では、101—150の間にある。著しい相異と見る事ができる。



次に運針の質として齊一度について見ると、これは速度と逆に最長時間練習組に齊一度の多いことが見られる。平均に於て 0.37 の差があるのみでなく、その個人成績の頻数分配が第六圖に見られるやうに、最長時間練習組にその少ないものが多いことが見られるのである。

歪みの現れる状態を見ると、平均に於て最長時間練習組が、最短時間練習組に比して 7% の相異があると云ふに止らず個人成績の頻数分配も第七圖に見るやうに、その最大頻数を異にしてゐるのが見られるのである。



以上のやうにして、長時間にわたる運針を課してその成績を練習時間の長短によつて比較して見ると、その速度においては、短時間練習組が秀れてゐるのであるが、その質において

は長時間練習組が秀れてゐると云ふ結果を示してゐる。これを短時間の運針検査の結果と比べて見ると、速度の點では愈々その開きが明かになつて來てゐるけれども、質に於ては逆の結果を示してゐるのである。即ち短時間運針検査には短時間練習組にやゝ質の良好さを示すものがあつたのに、この長時間運針検査では、絶対に短時間練習組が不利な結果を見せてゐるのである。

この結果はわたくし達に、次のやうな豫想を起させる。即ち短時間練習組は短時間の運針をなす場合には、その運針の質も量と共に秀れた状態を示すが、その時間が経過すると共に運針の形態が崩れて來るものがある。これに比べて長時間単位で練習した兒童は、最初から長時間の運針に対する心構へが出来て居てそのために運針の形が崩れると云ふやうな事が無いのであらう。と云ふことである。これを言ひ換へれば、運針の作業はたゞその運動の運び方と云ふことばかりが問題でなく、繼續してなされるのであるから、一つの時間に盛られた形が成りたつて來る。短い時間で運針練習をすると短い時間の運針をする形が成立し、長い練習時間で運針をすると長い運針をする形が出来る。従つて短い運針をするには短い練習時間で練習する方が有利だが、長い運針をする場合には、長い練習時間で練習した方が當然その形が崩れないと云ふことになるのである。長時間練習組の速度の落ちることもその一つの現れである。

この豫想を確かめるためには、長時間の運針をなす場合に、最初の部分での状態と、最後の部分での状態とを比較して見る必要がある。形の崩れることは、この兩者に於て悪く變化すること示される筈だからである。そこで最短時間練習組の A と、最長時間練習組の F とについて、長時間運針検査の最初の 20 針と最後の 20 針との歪み及齊一度を測定して見ると第七表の如くである。(この場合速度はこれを知ることかできなかつたのは遺憾であつた)

第 7 表

練習時間の長短による群別	最 初	最 後	變 化	
齊一度	A 毎日 1 回 2 分	0.74 (mm)	1.27	+ 0.53
	F 毎週 1 回 12 分	0.86	1.11	+ 0.25
歪 み	A 毎日 1 回 2 分	58.1 (%)	63.	+ 5.
	F 毎週 1 回 12 分	40.	53.	+13.

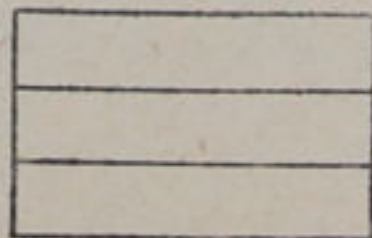
これを齊一度について見ると、最初は、短時間練習組に於てやゝ少い位であるが最後に於ては却つて、長時間練習組の方が齊一の度が高い位で、短時間練習組では、運動の崩れがやゝ著明であると見られる。次に歪みについて見ると、こゝではそのはじめの状態から最後の状態への變化はむしろ長時間練習組に著しいのではあるが、併しこの最後に示される長時間練習組の歪みの度は、短時間練習組の最初の歪みの度より

少いのである。即ち崩れても尙短時間練習組の歪みの度に達しないので、結局運針の崩れは長時間練習組に少いと云ふことができるのである。

かやうにして、長時間の運針に於ては、速度としては、短時間練習組に秀れてゐるが、運針の質としては、長時間練習組に秀れて見られるのである。即ち短時間運針の場合とは異つた結果を示すやうになつてゐるのである。そこにさきに述べた豫想、即ち短時間運針練習をすれば、短時間と云ふ時間的要素に盛られた運針運動の形が成立し、長時間練習をすれば、長時間と云ふ時間的要素に盛られた運針運動の形が成立するものと云はれる證跡が見られるのである。かく考へればさきに述べたやうな長時間練習組が後に備へて勢力を一時に出すことを差し扣へると云ふことも、この點から理解できる。

四、結論及び實際指導への示唆

以上のやうにして、この實驗的研究の目的とした練習時間の長短をいかにすべきかと云ふ點についての問題は、單純にはこれに答へられない結果を示した。即ち運針を短時間する場合には、短時間の練習が長時間の練習に比べて、量質ともに優つてゐるが、長時間の運針をする場合には、長時間單位で練習した方が量に於ては劣つてゐるが、質においては秀れてゐると云ふことが示されたのである。即ち、これを一般的に云へば、一つの作業の練習がなされる場合、そこに時間的要素が入つて、その作業の形が成立する。だから短時間單位の練習をすれば短時間としての作業に適合した形が、長時間單位の練習をすれば長時間としての作業に適合した形ができると云ふことができるのである。かやうにしてこれを實際の運針の指導について考へるならば、裁縫における運針は、實際の場合として長時間にわたるのが普通であつて、これに耐える必要があると云はれるのであるから、運針練習は長時間を單位として行ふべきであると見られる。この場合長時間の單位の練習は、速度に於て落ちるものがあるのであるが、運針として最も強く求めてゐるものは、運針の質であるから、殊に初歩の運針練習には、長時間を單位として練習することが大切ではないかと考へられるのである。



昭和44年4月11日
資料室 28

昭和十五年六月十五日印刷

昭和十五年六月二十日發行

定價金 參拾錢

東京市本郷區湯島六丁目十番地

發行者 渡邊 滋

東京市大塚仲町三六番地ノ二

著者 青木 誠 四郎

東京市本郷區金助町二十九番地

印刷者 杉 真 一

東京市本郷區金助町二十九番地

印刷所 日興舎印刷所

東京市本郷區湯島六丁目十番地

發行所 渡邊女學校出版部

電話小石川(85) { 六二〇一番
六二〇二番
六二〇三番
振替貯金口座東京一九八二〇番

研 究 叢 書

- 東京帝國大學助教授 文學士 青木誠四郎著
東京女子專門學校教授
- (1) 技藝學科の成績と智能との關係に関する研究 定價 金三十錢
- 東京女子專門學校教授 乾 ミチエ研究
- (2) 十二單及び袴の色目の研究 定價 金三十五錢
- 東京女子專門學校教授 牛込ちゑ研究
- (3) レースと毛皮との研究 定價 金三十五錢
- 東京女子專門學校教授 小野ミノル研究
- (4) 熨斗目に就て 定價 金二十五錢
- 東京女子專門學校教授 田窪ミネヨ研究
- (5) 衣冠の研究 定價 金四十五錢
- 東京女子專門學校教授 岡本すみ研究
- (6) 古代オリエントの服裝のデザインと裁縫 定價 金五十錢
- 東京帝國大學助教授 文學士 青木誠四郎著
東京女子專門學校教授
- (7) 運針に最も適合せる針の長さに関する研究 定價 金三十錢
- 東京女子專門學校研究
- (8) 針供養に就いて 定價 金十五錢
- 東京帝國大學助教授 文學士 青木誠四郎著
東京女子專門學校教授
- (9) 裁縫科の好惡とその理由に就て 定價 金三十錢
- 東京帝國大學助教授 文學士 青木誠四郎著
東京女子專門學校教授
- (10) 裁縫に於ける運針の重要性に就て 定價 金三十錢
- 東京帝國大學助教授 文學士 青木誠四郎著
東京女子專門學校教授
- (11) 小學校に於ける運針成績標準 定價 金五十錢
- 東京高等師範學校講師 文學士 大杉謹一著
東京女子專門學校教授
- (12) 縫殿に関する研究 定價 金五十錢
- 東京帝國大學助教授 文學士 青木誠四郎著
東京女子專門學校教授
- 運針指導に就て 定價 金八十錢

渡邊女學校出版部刊行物一覽

渡邊 滋 著

裁縫科教授改善資料 定價金 貳 圓

渡邊 滋 共著
梶原 恒子

洋裁の基礎的縫ひ方圖說 定價金一圓二十錢

渡邊 滋 監修
梶原 恒子 著

洋裁手藝外語辭典 定價金一圓五十錢

吉村千鶴子 著

最新裁縫科教授法 定價金二圓五十錢

牛込千榮 著

婦人子供服精義 第一編 定價金二圓
第二編 定價金三圓
第三編 定價金二圓
第四編 定價金二圓

松垣靜子 著

ドロンウオークハーダンガー 定價金 二 圓

松垣靜子 著

歐風刺繡 歐風刺繡附圖 定價金二圓五十錢

東京女子專門學校 研究部
渡邊女學校

女學用裁縫要義 上 定價金一圓五十錢
下 定價金一圓五十錢

中等學校用裁縫要義(洋服篇) 定價金一圓五十錢

專門學校用裁縫要義 上 定價金二圓五十錢
下 定價金二圓五十錢

